

エルネスト・ネットが20年ぶりのギャラリー個展で語った共生、身体、日本。「完全に独立した存在なんて、本当はどこにもない」

現代のブラジルを代表する作家のひとりであり、国際的にも高く評価されているエルネスト・ネット。小山登美夫ギャラリー六本木での個展に際してインタビューを行った



エルネスト・ネット。6月13日まで開催中の「Dreaming Beings（夢見る存在たち）」（小山登美夫ギャラリー六本木）の会場にて Photo by Xin Tahara

 **野路千晶（編集部）** SHARE    

現代ブラジルを代表するアーティストの一人、エルネスト・ネット。1964年にリオ・デ・ジャネイロに生まれ、現在も同地を拠点に活動が続けている。80年代後半より、ストッキングやスパイス、布など柔らかな素材を用いた作品を発表し、90年代以降は、鑑賞者が内部へ入り込む大型インスタレーションで国際的に注目を集めてきた。

その作品は、視覚だけでなく、触覚や嗅覚を含む身体全体で体験される空間として構成。背景には、50～60年代にブラジルで展開された新具体主義の思想も流れており、作品を通して、自身の身体や他者、さらには世界とのつながりを感じ直すことが試みられている。

現在、**小山登美夫ギャラリー六本木**では、20年ぶりとなる同ギャラリーでの個展**「Dreaming Beings（夢見る存在たち）」**を開催中だ。会期は6月13日まで。会場には、ドローイングや立体作品が有機的に配置され、呼吸するような空間が立ち上がっている。

本展にあわせて行ったインタビューでは、展示空間が生成されていくプロセスから、「共生」という思想、アマゾンの先住民フニ・クインとの出会い、そして日本についてまで、幅広く話を聞いた。

1 2 3 ... 5 

すべてが“ダンス”の状態にある

「今回の展示は、当初のプランからがらりと変わりました。最初はドローイングと彫刻を別々の空間に配置するつもりでした。でも、作品を会場に置き始めるうちに、少しずつ流れが変わっていった。作品自身が、“自分はここにいたい”と語り始めるような感覚があったんです」

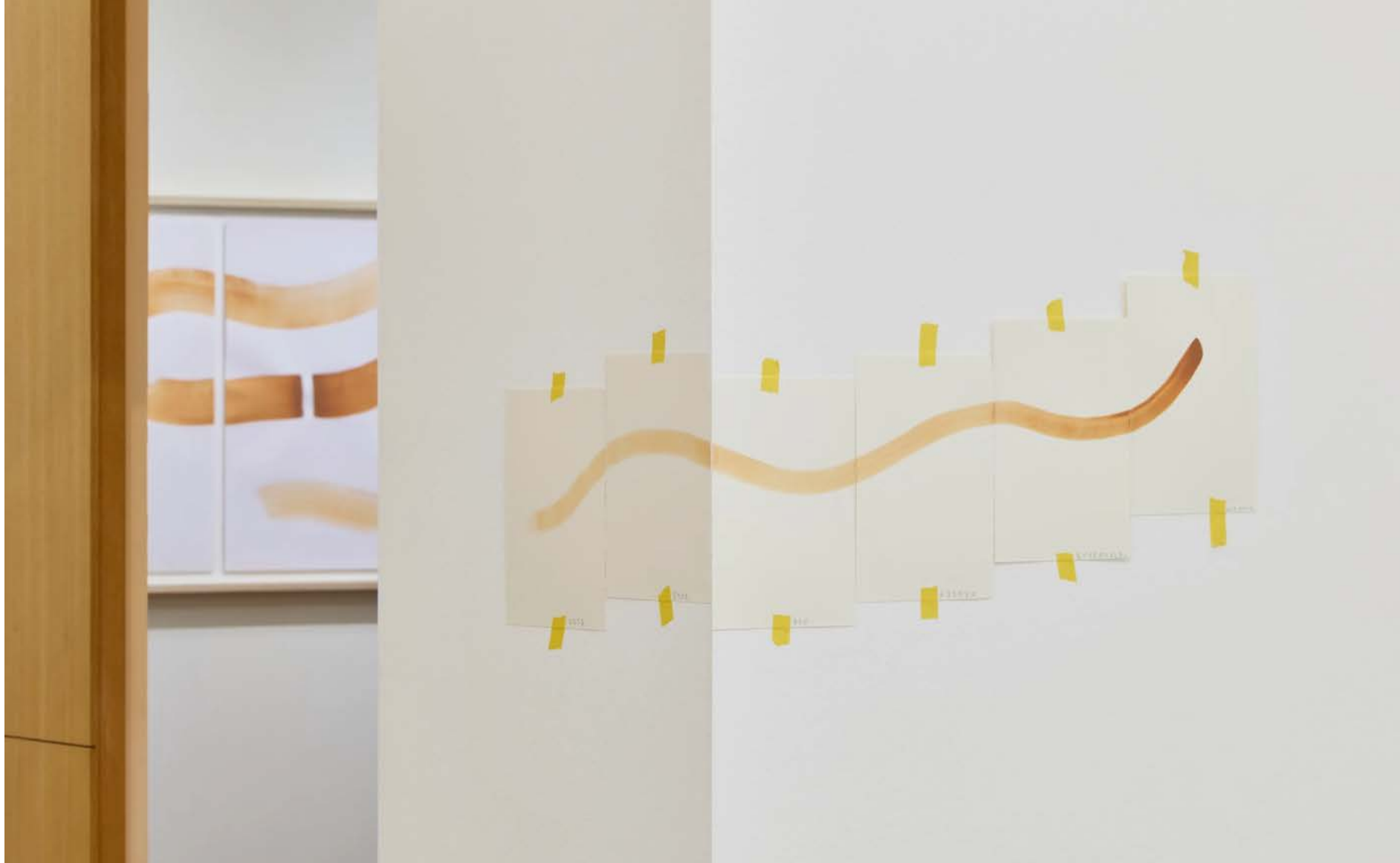
そう語るエルネスト・ネットの展示空間は、あらかじめ固定された構成物というよりも、作品同士の関係によって絶えず変化していく“場”と言えるのかもしれない。



会場風景 © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

小山登美夫ギャラリー六本木でじつに20年ぶりの個展では、自身でスーツケースに入れて日本へ運んできた作品を会場に置いた瞬間、展示全体の構成が変化し始めたという。事前の設計図に従うのではなく、作品同士の応答を感じ取りながら、空間は有機的に組み替えられていった。

ギャラリーにて制作したという新作ドローイング《あなたを見たとき、それがあなただとは気づきませんでした／When I saw you, I didn't realize that you was you》には、粘土と水が用いられている。紙はあえて歪ませた状態で設置され、黄色いテープによって固定されているが、そのテープもまた、たんなる支持材ではなく作品の一部として機能している。もともとは仮止めのために使っていた黄色いテープだったが、作業を続けるうちに、その暫定性や即興性そのものが重要な要素として残されることになったという。



会場風景より、手前が《あなたを見たとき、それがあなただとは気づきませんでした／When I saw you, I didn't realize that you was you》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

「完成されすぎた状態にはしなくなかった。もっと不安定で、“いま生成されている”感じを残したかったんです。最初はあとで別のものに変わるつもりだった黄色いテープも、見ているうちに、その暫定性や即興性そのものが重要に思えてきました」

彫刻に用いられているクロシェ（かぎ針編み）は、1990年代初頭、祖母の家で大叔母から学んだ技法。大叔母はネットの上達の速さに驚いていたそうだ。

「幼少期、祖母の家にはかぎ針編みや織りなどの手仕事を行う女性たちが集まっており、その環境に自然と親しみました。輪から始めて、少しずつ広がりながらかたちが生まれていく。そのプロセス自体が、とても生命的に感じられた。クロシェは単純な技法ですが、同時に、関係を編み続けていく行為でもあると思っています」

竹、綿糸、粘土、水——素材はいずれも素朴なものばかり。しかし、それらは強固に固定されることなく、重力や張力の均衡のなかで、かろうじて空間に留まっている。それをネットは、「**全部が“ダンスの状態”にある**」と言い表す。



会場風景より、《Ritual dance》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

生命とは関係の集合である

展覧会タイトルにある「Symbiosis（共生）」について、ネトはこう語る。

「**僕たちの身体自体が、すでにひとつの共生系なんです。人体は、無数の微生物との関係のなかで成立している。つまり生命とは、本質的に“単体”ではなく、関係の集合なんです**」

その視点は、人間関係や社会にも接続されていく。

「いまこのインタビューも完全に共生です。僕が話し、翻訳され、あなたが記事を書く。全部が相互作用のなかで成立している。僕たちは、つねに何かと関係しながら存在しているんです。呼吸もそうです。僕たちは地球と絶えず物質を交換している。食べて、吸って、吐いて、生きている。つまり、完全に独立した存在なんて、本当はどこにもないんです」



会場風景より、《szeb-insepa 18》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

「szeb-insepa」シリーズにも、そうした思想は明確に表れている。18の要素から構成される《szeb-insepa 18》について、ネトは「**18の存在が一緒に前進しているように見える**」と説明する。クロシェは輪から始まり、螺旋状に展開していく。そこには、「始まり→中間→終わり」という直線的な時間感覚ではなく、「始まり→中間→始まり→中間……」という循環構造がある。

「**生命は、終わりへ向かう直線ではない。絶えず変形し続けながら循環していくものなんです。波、あるいは呼吸のように。そして死は“終わり”ではなく、別の生命状態への移行だと思っています。僕たちは死を恐れるあまり、“いま”という時間を生き損ねている。でも本当は、いまこの瞬間こそが奇跡なんです**」

だからこそ彼にとって作品とは、“生命が相互依存によって成立している”という事実を、身体感覚として再認識するための装置でもある。



会場風景より、《szeb-insepa 18》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

「動物倫理」の言葉の背景にある思想

展覧会タイトルの後半に置かれた「Animal Ethics（動物倫理）」という言葉について、ネットは“透明性”の問題として語る。

「この作品には隠し事がないんです。素材も構造も、全部見えている。どうやって成り立っているのかを隠そうとしていない。糸も、竹も、重力も、接続も、そのまま露出しているんです」



会場風景より、《zeb-insepabi 8》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

そこには完成品として表面を整えるよりも、ものが成立していく過程そのものを可視化しようとする態度があるが、背景には、彼自身の政治的記憶も深く関わっている。ネットは1964年のブラジル軍事クーデター後の時代に育った。当時は政治について自由に話すことが難しく、誰が密告者かわからないような緊張が社会に漂っていたという。

「物事を隠さなければならない時代だったんです。知らない相手に政治の話はできなかった。誰がスパイかわからなかったから。でも、いまの世界もまた別の意味で“嘘”に覆われていると思う。しかも、SNSを通じてその嘘が一瞬で何百万人にも拡散されてしまう」

だからこそ彼の作品では、糸や竹、接続部、重力による支え方に至るまで、作品を成立させている要素が隠されることなく露出している。完成されたイメージを提示するというより、「どう存在しているのか」を、そのまま開示しようとしているようにも見える。そうした感覚の延長線上で、彼は次第に「動物のほうが、人間より倫理的なのではないか」と考えるようになったという。



会場風景より、《Ritual dance》（2026） © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

ネットがここで語る「倫理」は、一般的な意味での善悪の基準とは少し異なる。むしろ彼が惹かれているのは、“ありのままに存在している”ことそのものなのだろう。現代社会では、人は社会的役割を演じ、情報を操作し、ときに本心を隠しながら生きている。いっぽうで動物は、自分を別のものとして見せようとはしない。ネットは、そうした“存在の透明さ”に、一種の倫理性を見出しているように見える。

ネットにとって重要なのは、概念として思想を説明することではなく、その感覚を他者と共有することだ。そのため近年は、作品タイトルについても、「意味を固定するもの」というより、「身体に振動を与えるもの」として考えているという。

「僕は最近、言葉を“説明”としてより、“振動”として考えているんです。理性的に理解するだけではなく、身体全体で受け取ってほしい。歌やリズムみたいに、意味になる前の段階で何かが身体に入っていくことがあるでしょう？ 作品タイトルも、そういうふうに機能してほしいと思っています」

古い自己が死んだ瞬間

ネトの近年の実践を語るうえで欠かせないのが、アマゾンの先住民フニ・クインとの出会いだ。ただ彼自身は、それを突然の方向転換としてとらえているわけではない。むしろ近年の活動もまた、これまで一貫して探求してきたテーマの延長線上にあるものとして位置づけている。2000年には、妊娠中だった妻との結婚式そのものを、リオ近代美術館における展覧会として実施した。



結婚式の様子 O casamento - Lili, Neto, Lito e os loucos, 2000 Material: polyamide tulle and stockings, aluminium, polystyrene beads, sand. Dimensions: 2000×1400×1600 cm Installation view O casamento - Lili, Neto, Lito e os loucos, MAM RJ Photo by Antonio Gaudério

「結婚式そのものが、すでに儀式ですね。僕にとっては、アートと人生が明確に分かれていたことは、あまりなかったんです」

会場には巨大な布の空間や米袋が設置され、妊娠した身体そのものが作品空間の一部として存在していた。そこでは、胎内、誕生、身体、関係性といった主題が、制度や象徴としてではなく、現実の身体を通して立ち上がっていた。

フニ・クインとの出会いは偶然だった。知人に誘われ、ほとんど予備知識のないままアマゾンへ向かったという。そこで彼は、アヤワスカ（ニシパエ）の儀式に参加する。暗い森の中、火が焚かれ、人々は輪になって座る。歌声だけが静かに響き続ける空間でアヤワスカを飲み、彼は巨大な蛇——ボアコンストリクターの精霊に包まれるような感覚を体験した。

「彼らにとって、その蛇は自然と人間を接続する存在なんです。自然というより、“森そのものの意志”に近い感覚だったかもしれない」

2杯目を飲んだときには、「自分は死ぬ」とはっきり感じたという。しかし後になって、それは肉体的な死ではなく、「古い自己の死」だったと理解した。

「そのときは本当に、自分が終わると思った。でもから考えると、何か古い部分が終わって、別の部分が成長し始めたんだと思う。あの経験は、自分のなかの感覚を大きく変えました」

この経験を通じて、彼は“人間は自然の外部に存在していない”という感覚を、より深く確信するようになった。あわせて、先住民社会には「自然」という単語そのものが存在しないことにも言及する。

「“自然”と言った瞬間、私たちは自然を自分たちの外側に置いてしまいますよね？でも本来、人間も自然の一部です。森も川も動物も、私たちから切り離された存在ではなく、兄弟や姉妹のようなものなのではないでしょうか」

ネトの作品に繰り返し現れる“接続”や“浸透”の感覚は、こうした経験とも深く結びついている。



会場風景 © Ernesto Neto Courtesy of Tomio Koyama Gallery Photo by Kenji Takahashi

日本には世界に必要な「優しさ」がある

今回の来日、ネットが強く感じたのは、「創造性が社会全体に浸透している」という感覚だった。アニメやポケモンのようなポップカルチャーだけではない。街中のサイン、機械、自販機、食品パッケージ、都市空間の細部に至るまで、日本では創造性が日常のレベルで自然に組み込まれている印象を持ったそうだ。

「創造性が、美術館や特別な場所だけに閉じ込められていないんです。街を歩いているだけで、それが社会全体の身体のなかに流れている感じがする。アニメもそうだし、機械のデザインもそうだし、コンビニの小さなシステムにまで、何か“工夫する喜び”みたいなものがある」



来日中、ネットが気になって撮影したというマンホールのデザイン

同時に彼は、日本社会にある“優しさ”にも繰り返し言及した。

「日本には、人と人がちゃんと関わろうとする感覚がまだ残っているように感じます。礼儀正しさだけではなく、たとえば地下鉄の動線や街のサイン、自販機やコンビニのシステムに至るまで、“他者がどう動くか”を前提に空間が設計されている。“誰かのために少し考える”という感覚が社会のなかに残っている気がするんです。もちろん問題がないわけではない。でも、人と人が完全に切り離されていない“優しさ”は、いまの世界に必要なんです」

いっぽうで、スマートフォンを中心とした現代社会については強い危機感も示す。ギリシャ神話のナルキッソスを引き合いに出しながら、現代人は「自分自身の像」ばかりを見つめ、他者との身体的接触を失いつつあるのではないかと語る。

「みんな、自分の像ばかり見ている。でも本当に重要なのは身体です。身体を通して他者と接触すること。いま僕たちは、それを少しずつ失っている気がします」

だからこそ彼は、改めて「身体」の重要性を強調する。

「身体こそが、この世界を再び他者と接続する鍵なのではないでしょうか」

ネットの作品は、何か明確なメッセージを提示するというより、まず身体に働きかけてくる。糸のたわみ、竹のしなり、わずかに不安定な均衡。そこでは、世界は固定されたものではなく、無数の関係の上に仮設的に成り立っているものとして現れる。

「完全に独立した存在なんて、本当はどこにもないんです」

インタビューのなかで繰り返されたその言葉は、思想としてではなく、空間そのものの感覚として展示全体に浸透していた。



エルネスト・ネット。6月13日まで開催中の「Dreaming Beings（夢見る存在たち）」（小山登美夫ギャラリー六本木）の会場にて Photo by Xin Tahara



エルネスト・ネット 「Dreaming Beings（夢見る存在たち）」
（エリア：六本木、乃木坂）
2026年5月2日(土)～2026年6月13日(土)
開催中（あと9日）

